

◇ 書 評

若越をひらいた人たち 青山晴男著
 東洋書院刊 A5判 三五七ページ
 定価一、八〇〇円

人間が歴史をつくり、歴史は人間をつくるといわれる。本書はまさに若越の郷土をひらいた著名な人物群像に照明を当

てたものである。そのさい一、きょう土のあけぼの、二、国府があったころ、三、武士が争ったころ、四、藩政のころ、五、幕末のころ、六、きょう土百年の礎、と六つの時代に区分し、それぞれの政治・社会・文化的背景を展望したのち、全体で三〇余名の人間像を、史実に即しながらエピソードや伝承を交えて、大変興味深く描き出している。

例えば「藩政のころ」では、一、名作をのこした越前の美術工芸家として、浮世絵の元祖「岩佐又兵衛」、刀工の名人「下坂康継」、武器の名工「明珍吉久」、二、「若狭農民に殉じた「松木庄左衛門」、三、浦見川をひらいた「行方久兵衛」、四、月が瀬用水をひらいた「上島重平」、五、新しい学問の道を開いた若狭の学者には、洋医学を開いた「杉田玄白」、国語研究に新学風をおこした「伴信友」、国語学研究に新しい道を開いた「妙玄寺義門」を取りあげ、六、天保の飢饉と「大井帯刀」など、計一〇名の人物がみられる。県下ではすでに郷土の人物についての

数々の著述があるが、古代から近代に至る著名な人物を一本にまとめ、しかも極めて平易でかつ啓発的に叙述したものである。ましては、まさに画期的なものと言えよう。日本の歴史全体の流れのなかで、郷土の再発見が強く呼ばれている折から、一般の読者はもちろん、小学校、中学校の教材として、またこれら生徒の読物としてはなほだ時宜を得たものである。

なお著者は、かつて中学校長として在職中は、福井県社会科研究協議会長をつとめるなど、本県社会科教育の発展に尽力するところが、極めて大きく、また社会科副読本や郷土資料等の編集にも優れた業績をあげている。

(三上一夫記)